法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

心もうきたつものは

阪下, 圭八 / SAKASHITA, Keihachi

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
6
(開始ページ / Start Page)
26
(終了ページ / End Page)
29
(発行年 / Year)
1960-12-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019013

心もうきたつものは

阪下圭八

折節のうつりかはるこそ、ものごとに哀なれ。

もののあはれは秋こそまされと、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の声などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、墻根の草もえいづるころより、やや春ふかく霞わたりて……

有名なつれづれ草一九段の冒頭の個所で誦習するに価する名文だとおもいます。ですが、いい気になって朗々とよみすすんでいるうちに、私たちはとんでもないよみちがいを犯してしまっているのではないでしょうか。それはつれづれ草、ないし作者兼好の精神構造をどううけとめるかにかかわることなのですが、このばあい、どこと名指していうとすれば、「今一きは心もうきたつものは」ということばのつかみ方の問題です。永積安明氏は「徒然草について」（中世文学の展望）において、この「随筆」が〝「法師のやうにもあらず」（八四段）ひどく人間くさい作品だ〟といわれ、その一つの例証として一九段の右の部分をあげて、〝常識的、固定的な「秋のあはれ」によりかからないで、心のうきたつよろこびにおいて、秋にもまさる春の美しさを肯定するのである〟（傍点阪下）と指摘されています。つまり、「心もうきたつ」が春のよろこびと＝でむすばれているわけで、その点については、永積氏ほど「積極的」に評価するしないは別として、諸註も大体同様な解し方をしています。たとえば「今一層心もうきうきとして面白いものは……」（佐野保太郎『新講』）のごとくで、でなければ注記を敢てかかげてはおりません。

実は私も以前はぼんやりと右のような解釈にしたがっておりました。心もうきたつ春のけしきとくれば、「春たつといふばかりにやみよしのの山も霞みてけふはみゆらん」とか、「春はきぬ　春はきぬ　初音やさしきうぐひすよ」といったイメージが連想されてくるのですが、多少とも自発的につれづれ草をよむようになってからは「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」とか「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ」とか、どきっとさせられるようなことをかいている兼好が、いったい春という季節を右のような気分でうけとめているものかどうかと考えるようになりました。そんな私なりの疑問を整理する緒をあたえてくれたのは、藤原正義氏の「兼好論覚え書」（日本文学53号）です。この論文のなかで「うきたつ」にふれているのはつぎの文です。

……一九段の「今ひときは心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ」について、兼好は「春の景色の美しさを、心のうきたつものとして、秋の静的で内省的な美しさと対照的に強調し、生のよろこ

びを、とにかく人間的に肯定することができた」（「日本文学の古典」）といわれるが、この解釈は当らない。文脈をたどれば、心もうきたつは「心も地につかない、不安である」の意味であり、春のけしき（気色）が秋に比べて今ひときはそうだというのであり、それは後出「よろづにただ心をのみぞなやます」にあい応じている。

藤原氏の論文の全体の論旨は、私は賛成できませんが、右の点の指摘は妥当だと思います。「心もうきたつ」を、心も地につかない落着かない、ととらないと、「今一きは」ということばの意味は全くうき上ってしまいます。たとえば、前記佐野氏の『新講』は「今一きは」の語釈のところで、〃秋に比すれば今一層といふ意。文字の上では秋も心が浮立つが、もっと心の浮立つのは春だといふことになってまづいが、かういふ事は、不用意な古人の文には仕方がない。「今一きは物のあはれ深く、心も浮立つものは」と解すればよい〃と、とんだ兼好の文の不用意さを発見されてしまわれたのですが、実は〃秋も心が浮立つが、もっと心の浮立つのは春だといふことになってまづ〃くもなんともないわけで、ただそのばあい「うきたつ」の語を現代風にうけとるのではなく、古語としての内容にそくして、心が身にそわぬ、つまりもののあはれに触発されて落つかぬ心の状態ととればよいことなのです。

註　諸抄大成では「心もうきたつ」の語釈として、例の蘇東坡の詩「春宵一刻価千金花有清香月有陰」と「雁鳴テ菊ノ花咲秋ハアレド春ノ海辺ニ住吉ノ浜」などの歌をひいた編者の浅香山井の「予が聞きをける説」と、それにあい似た「参考抄」の説をかかげるのみだから、古注も多くこれに類した解にとどまっていたのかもしれません。ただ「文段抄」が貫之の歌「春秋におもひみだれてわきかねつ時につけつつうつる心は」をあげ、「此歌の心にかなふべき也」といっているのは、正鵠を射たうけとめ方だとおもいます。（なお、ついでにいえば、解釈と鑑賞の「徒然草の新しい研究と展望」（32年12月号）所載、内海弘蔵『評釈』以来の諸説をこまかく比較検討した「徒然草の正しい解釈のために」にも、一九段の右の個所はとりあげられていません。）

*

「うきたつ」という語は、つれづれ草には一箇所しかでてきませんが、大言海にはつぎのように記してあります。

うきたつ　浮立　㈠立チアガル。起ル。続後拾遺集、五、秋、下「曇ルトモ、思ヒゾハテヌ　秋霧ノ、うきたつ空ニ、澄メル月影」㈡心、大イニ浮ル、源、三十一槇柱十三「暮レヌレバ、心モ空ニうきたちテ、イカデ出デナムトオボスニ」㈢心、騒立ツ、方丈記「世ノ中うきたちて、人ノ心モヲサラズ」

㈢にひかれている方丈記の文は、福原遷都のさまを叙した「古京はすでに荒て、新都はいまだ成らず。ありとしある人は皆浮雲の思ひをなせり」のすぐあとのところで世をあげて落付かぬさまとなっているのを示しているのですから、やや強い表現です

が「騒立」つといいかえてもいいとおもいます。しかし、㈡の源氏物語真木柱の巻の「心も空にうきたちて」を右のようにとるのはまずいのではないでしょうか。ここは意味を補えば髭黒の大将が、思わぬ首尾をとげて、近く自邸にひきとることとなった王鬘のもとへ行こうと「心も空に浮き立ちて」となるところなので、やはり「そわそわと落付かず」ととった方がいいようです。武骨一辺の大将で、玉鬘からは「いと心づきな」くおもわれてはいても、右のようなばあいには、北の方に対して遠慮心もある髭黒なのだから「心、大イニ浮カル」はいかにもむくつけき解釈で、一寸可愛想になります。さらに㈠についていえば、こともあろうに、風雅で艶な新古今以来の情調を守る二条派の撰の歌をかかげたのはまるでぶちこわしです。どう考えても、右の歌の霧は立チアガ」ったり「起」ったりしている様子はみえません。大言海は、出典の文脈や文学としての性質を充分ふまえないでいわば即物的な解釈をほどこしすぎていると思われます。「うきたつ」は以上の三例に共通した語義として物（ないし心）がよりどころを失って落付かなくなる、とでもいっておいても支障はないようですがどうでしょうか。

註　源氏物語には「浮きたる」ということばがわり合い多く出てくるようで、薫と匂宮の間にたってとつおいつしている浮舟が「いとあやしういかにしなすべき身にかあらむと、うきたる心地のみすれば」（浮舟）というふうになっています。またつれづれ草にも「かつあらはるるをもかへり見ず、口にまかせていひちらすは、やがてうきたることと聞ゆ」（七十三段）とあって、これはやはりよりどころのないことの意です。

どうせ古語辞典なんどをひろいよみしてのつけ焼刃なのだから柄にもないせんさくはやめにしておきますが、要するに「うきたつ」に限らず「うく」「うかれる」といったことばが、ウキウキズキズキのようなうわついた義でもっぱら通用してくるのはどうも近世以降、「浮世物語」などという作品が成立するころからしいというのが、辞書渉猟の結論なのです。

＊

ところでふり出しにもどっていうと、私は藤原氏の指摘に大いに啓発はされたものの、その論のすすめ方には不満があります。前に引用した部分からだけでも推察がつくようにあの指摘をもって氏は〝心のうきたつよろこびにおいて春の美しさを肯定する〟という永積氏の論を、いや兼好はむしろ春に不安を感じていたのだ、つまり「兼好は生については極めて消極的にしか語っていない」として反ばくされているのです。だから、永積氏も藤原氏も、一般に春を駆歌することは人間的であり、当代にあって積極的な意義をもっていた、という考え方の基本では同じであるということになります。しかし私は、そういった評価の仕方が文学つれづれ草を正しく位置づけるのに役立つかどうか、大いに疑問なのです。第一兼好は、春をもちあげて秋をおとしめるといったいわば春秋諍いをこの十九段で判じようとしているのではありません。「も

のものあはれは秋こそまされと、人ごとにいうめれど……」という出だしはたしかに春秋諍いの発想を枕としているけれど、作者の関心の帰するところは静止的にとらえられた個々の季節やその情景ではなく、全体として推移、流転する世界の様相であったとおもわれます。そして注目すべきことは「もののあはれ」という古来いいふるされてきたことばをここで否定的に媒介させているということです。「もののあはれ」をしかつめらしく解析すれば、ものは Ding an sich（物自体）のごとく不可知なもので、それから触発される情趣があはれということなのだと思います。つまり、情感としてはたしかめられるがそれが何に因るかに漠としてとらえようがないという、人間の認識の多少とも前論理的な段階でのことばだといえるかもしれません。兼好はそのことばを、まず「折節のうつりかはるこそものごとに哀なれ」、いいかえれば世界の有為転変こそが人の心にあはれをもよおすのだとして本質的にふかめ、そのことによって「春はただ花のひとへに咲くばかりもののあはれは秋ぞ勝れる」（拾遺集九雑下）といった発想を止揚しているのです。くどいようですがくり近していうと、兼好は秋に対して春を、というのではなく「秋ぞまされる」というような情感の固定性（ないし古代性）*を止揚しているのですから、この部分をもって春を肯定したとか否定したとか推測するのは何れもよみ方として忠実でないし、さらにその上に評価をくみたてるのは当を得ないことだと思われます。

いうまでもないことながら、兼好は世界の有為転変が人の心にあはれをもよおすということを単に論理として十九段で述べようとしたのではありません。この段のモチーフは疑もなく四季そのときどきの推移の趣ふかさへの感動から発しています。しかし、そのような転化の相をまさに文学として定着させるには、たとえば「もののあはれ」の語に対してよりすすんだ認識の光をあてるという、抽象の論理の思考作用がどうしても必要であったと思います。おそらくその点で、千載、新古今あたりからの歌風の変貌とそれに伴う歌学の誕生という和歌史の動向との連続面が発見されてもいいようですし、同時にまた当時二条派の四天王と称されながらさしたる歌ものこしてない兼好において空前絶後の批評文学が誕生したということの、文学史的、思想史的意味がもっともっとつきつめられてゆかねばならないと考えます。

* 四季つまり自然の運行と人間の情感が多少とも＝でむすばれているという意味で、それに対して中世性とは総体としての世界や人生に目をむけざるを得ず、そのことによって文学的な個（自我）が意識されてきている、と考えています。

あとがき 「国文学時評」が私への注文でしたが、どうにも間にあわなくなって右のような旧稿（法政大学院ニュース一九五八年二月に掲載）で責をふさがせて頂きました。なお、学界時評・動向に類するものとしては、「日文協第十五回・大会について文学35年10月）、「中世文学研究の現段階と問題点―随筆・日記」（文学・語学35年12月）をかいているので、そちらをご参照下されば幸に存じます。